健康友の会みみはら2021年6月会員数（世帯数）

会員数	39,853	（前月比）＋	31
郵　送	9,366	（前月比）－	49
手配り	28,619	（前月比）－	65

協同基金到達額　2,514,947,000円（6/30現在）
［前月比 7,969,000減］
協同基金出資者数　20,597名（6/30現在）
いのちを守る助け合い募金額　0円（6/1～30）

とも friend

2021 8 No.455

発行
健康友の会 みみはら
民医連
本部事務局組織部
機関紙編集委員会
〒590-0821
堺市堺区大仙西町6丁184-2
Tel.072-244-8061
Fax.072-244-7860
1部 30円

平和への願い語り継ぐ

7月10日
第36回堺空襲犠牲者殉難地追悼会

悲惨な歴史を風化させない

76年前の7月10日未明、110機を超えるB29の大編隊が焼夷弾の雨を降らし、たちまち、大浜、竜神、宿院一帯が猛火に包まれました。7万人を超える方が罹災され、1万8009戸が焼失や破壊されました。この堺大空襲で、1860人余の方が悲惨な最期を遂げられました。

第36回堺空襲犠牲者殉難地追悼会が7月10日、南海本線堺駅東口すぐ勇橋の上で行われました。

「友の会」大浜支部より11人が参加。世話人の達務さんが自身の戦争体験を語りました。達さんは、「今また、財界や一部の政治家たちによって、憲法を変えて再びあの恐ろしい戦争をする国に逆戻りさせようとしています。戦後何十年も家族や子どもたちを守り、日本の国の再生・復興のため働いてきた人たちは今や後期高齢者。毎年、年金は下がり、医療・介護などの社会保障も改悪されています。国民の生活と権利を守り、そして戦争をさせない国づくりをみんなで一緒に頑張りましょう。今こそ平和の尊さを伝えていきたい」と締めくくりました。

大浜支部の北谷さん、中川さんから、折り鶴が贈られました。

参加者は、殉難之地の碑の前に、ろうそくの灯ったグラスを捧げ、犠牲者への鎮魂と、平和への願いをつなげていくことを誓いました。

堺には5回も空襲がありました。二度と戦争を繰り返してはなりません。「とも」紙面でも「私の戦争体験」が再開されました。堺空襲の悲惨な体験を風化させることなく、「友の会」でも平和のバトンを繋げていく取り組みをしていきます。

焼夷弾の明るさは真昼のよう

堺区西湊町
達　務
（81歳）

私は、生まれも育ちも西湊町です。1940（昭和15）年1月12日にこの地に生まれて、81歳の今もここに住んでいます。

1945年7月10日の堺大空襲の時、わずか5歳で、戦争のことを覚えているのはこの時だけです。その時は、祖母、母、妹の家族4人で防空壕の横で寝ていました。近所の人が、「空襲警報が鳴っているで！早く遠くに逃げないと、みんな焼け死ぬで！」と大声で叫んでいる声を聴いて、慌てて防空頭巾をかぶり、家を出ました。なぜか一人で南海電車湊駅前の喜福紡績の大きなレンガ造りの工場の前を南に、今の汐穴線に続く畑の中を大人たちに混じって逃げ回っていました。空から真っ赤に焼けた焼夷弾がひゅるひゅると音を立て、雨あられのように落ちてくる中、必死に逃げました。あちらこちらで悲鳴が上がり、次々と人が倒れていました。そんな中、なぜか馬が前足を高く上げ暴れていたのを覚えています。子ども心に焼夷弾はピカピカと光って、その明るさは真昼のようでした。どれぐらい時が過ぎたのかわかりませんが、爆撃も終わり、家の前に帰ってくると、いつもかわいがってくれた近所のおじいさんが路地道で焼夷弾の直撃で亡くなり、戸板に載せられていました。私の家族は幸いにも無事でした。

空襲後、近所の人たちに連れられて土居川の住吉橋付近まで来ると、川面いっぱいに数多くの遺体が浮かんでいました。その遺体を棒のようなもので引っ張り上げ、川のふちに並べていました。そのたくさんの遺体を見て怖くなり、逃げ帰りました。

翌月8月15日、天皇陛下の玉音放送を聴きましたが、5歳の私には何を言っているのか、わかりませんでした。近所のおばさんたちの話では、明治、大正、昭和と長い戦争が終わった日だといって、「この放送がもっと早くされていたら、堺も焼け野原にならずに済んだのに、赤紙一枚で軍隊にかりだされ、多くの兵隊さんが死なずにすんだのに…」「広島、長崎の原爆も落とされず、何十万の人も死ななかったのに」と泣いていたことを覚えています。

それからが大変です。住む家も、着るものも、食べるものさえない焼け野原の中から、生きていくのは戦争の時よりも苦しく大変なことでした。

寄稿　私の戦争体験〈43〉

戦争体験手記募集を見て、お寄せいただいた手記を順次掲載しています。

聴診器

子どものころは、梅雨はしとしと降る雨とカタツムリに代表される穏やかな季節だった。しかし、ここ10年は「大規模水害がどこで起きるのだろう」と、戦々恐々とする季節に変わってしまったように感じるが、読者のみなさんはいかがか？▼今年は伊豆で酷い土石流がおきてしまった。宅地の上方の森林が切り崩され、大量の盛り土があった場所が崩れたらしい▼気候変動により、雨量の増加がこれまでの常識をはるかに、確実に越えてきており、今後も大規模水害は必ず繰り返されるだろう。自然災害から市民を守ることに一刻も早く国や自治体が舵を切り直してほしいと思うのは私だけではないだろう。今生きる人だけの目線での便利や豊かさを続けていけば、孫たちが主役で生きるころは、安全に生きる自然環境が残されているのだろうか。100年先を見据え、私たち自身も生活を真剣に見直してみよう。ここまで便利じゃなくてもいいと思えるものはあるはず▼ミサイル防衛や辺野古埋め立てやリニア新幹線への巨額の投資より、国内の古くなったインフラの補修と、新たな感染症をふくむ自然災害から市民を守ることが、真の国防だろう。人を大事にする国に脱皮できるよう、声をあげていきたい。（緒方浩美）